とす、未もろ〳〵の介をあげ用ゆる事を去らず、元祿の始の頃より大に此弄おこりて、都鄙全く時行す、賞鑑家古人の貝をよみをける古歌を取集て、四條大納言公任の撰び給ふ三十六の歌仙の數に配して、つゐに三十六歌仙介となしてもてはやしぬ、其時歌を集る事ひろからず、不審なる引歌多し、因て其後これを考て、新撰の歌仙介世に行る事は、後歌仙集序中に見えたり、前後の三十六介となりぬ、今按るに、後に撰し方尤委し、取用べし、

〔山槐記〕應保二年三月七日、參內、貝合事、右方人右大將以下、於宮殿上議定云々、八日、午刻參內、貝合、左方人中宮權大夫實長卿、參議親隆卿、能登守重家朝臣、右少將通能朝臣、左衞門權佐爲親、予、○藤原親忠等於宮御方議定、大略令爲親書折紙、送右府御許、令申子細、爲親所參向也、

一奉幣事、八幡賀茂住吉、已上使、所衆、前右府御沙汰歟爲用意使所衆事、召仰出納仲政了、

一願事、八幡、御神樂賀茂、競馬住吉、參詣

一當日誦經事

一貝風流、可作伊勢海

一方人裝束、束帶

晡時參花山院、申承雜事、退出、九日、未刻參內奏事、○略中晩頭右府被參、貝合事等申承、十日、今日爲貝合祈禱、左方奉幣、右清水、賀茂、住吉、右府被致幣帛沙汰、彼家仕丁持之、下家司相具、向近衞河原、藏人左兵衞尉平信季、向彼所發遣之、使可用藏人所衆之由有議定、仍三人可差遣之由、兼所仰出納仲政也、抑陰陽師不參、藏人可致沙汰歟、又自右府可有沙汰歟、十一日、申刻許於宮殿上、貝合方人有之事、右府爲弘有結構、而頗不定事、仍不可有過差之由、以左衞門權佐爲親、左方人也被遣仰、有出御、此後參大殿之處、職事等退出、仍空以退出、

〔袋草紙三〕予應保二年三月三日昇殿、來十三日中宮○二條后藤原育子御方可有貝合事、仍俄所仰下也、同七